

座談会

「工学部創設のころ」

昭和五十二年九月二十八日（水）
於 大乃屋（大阪市東区島町一一一六）

（出席者）

田 中 晋 輔	初代工学部長
前 田 春 興	工学部教授
小 川 雅 弥	"
亀 井 清	"
太 田 義 一	"
（聞き手）	
横 田 健 一	文学部教授
田 藤 田 香 融	"
菊 男 年史資料編集室長	
大 場 義 之	"
	主幹

た関西工専も、私大としては、軍部による学校の統廃合を免れるために置いたもので施設面で自慢できるものではありませんでした。

戦後、昭和二十三年に新制大学に切り替った時、工専を工学部として設置したい、と文部省に申請したが、「設備不十分」が最大の理由で不認可になりました。

その後、二十五年に短期大学部を設置し商工経営科を作ったが、三十一度以降学生募集を停止しました。

昭和三十年代にはいると、技術革新の時代が始まつて技術者不足が叫ばれるようになり、「関西大学に工学部をつくれ」という雰囲気が出てきました。幸い、理事会、校友会も、工学部設置に熱心で、先生方をお招きしてめでたく誕生しました。そして、今や工学部を除いては関大を語れない状況です。学生数といい、教員数からも最大の学部になりました。

そういう状況をふまえて、ご苦心談などをうかがいたいと存じます。

八画六臂の活躍した太田雞一教授

横田 関西大学は、創立以来、文科系の学校でしたから、理科系の学部に対する経験が全然ありませんでした。昭和十九年にでき

田中 私は、いまお話しになつたような事情は全然知りません。大学設置審議会、大学基準協会の委員を永くやつてゐる間に、関大の板橋（菊松）さんと親しかつた。その板橋さんから「こんど

関大で、工学部設置の話があるんや。あんた一つ面倒みてやつてくれんか」という話があつた。正式じゃなくて、茶のみ話といった程度で、別に気にしていませんでした。

それから大分経つて、三十二年の秋に、久井（忠雄）専務理事と、岩崎（卯一）学長から「いっぺん会いたい」と、電話がつて、初めて会つたんです。

薦田　どこで、お会いになりましたか。

田中　甲陽園の播磨、と思います。その当時、私は（三十二年、大阪大学を定年退官）松下電器に關係していたので、即答しかねました。松下（幸之助）さんに、関大からの話をすると、松下さんは喜んで、「そりゃ、やつてあげなさいな」と言つた。それで、引き受けたんです。

最初は、大学設置審議会のこともあるので、できるまでの助産婦役のつもりでした。まさか工学部長をやるとは、思いもよらなかつた。

そんな具合ですから、前のことはいつこうに存じません。

小川　工学部の創立前のこととは、太田（雞一）先生と、前田先生しか、わからないでしょうね。前田先生は、十月から嘱託ですか？

前田　そう。十月一日付です。あの時は、もう文部省へ書類を提出済みでしたね。

旦　先生には太田先生が、その前から会つておられたのでは……。前田　三十二年の夏に、太田先生から「関大へ来てくれんか」という手紙をもらいましてね。私、お目にかかつたこともないので、京都大学の藤本武助先生を訪ねると、「太田さんは、昔、京大で助手をしつたんや。ところで、お前、関大へ行けや」と言

われた。手紙をもらった事情もわかつて、帰途、初めて太田先生のお宅へ伺いました。

横田　百万遍のところですか。

前田　そうです。太田さんは、「（工学部は）間違いなくできる。十月から嘱託として来てくれないか」と言うので、結局、半年早く関大に来させていただきました。

横田　文部省への申請は、前年の九月末ですかね。

前田　文部省に出す「教員組織」は、太田先生が、ほとんど一人で作られたのではないかと思います。まさに八面六臂でしょうね。

横田　関大で、工学博士は、太田先生只一人でしたから。

薦田　工学部設置が最終的に理事会で決まったのが三十二年九月十九日。臨時評議員会が九月二十七日ですね。

横田　評議員会議長は阿部甚吉さんでした。非常に鮮やかに議事をさばかれて、反対はなくパッと決まつた感じでした。

田中　小川君は、創設期には……。

小川　阪大で講師をしていた三十二年八月ごろ、香坂（要三郎）先生に「お前、関大へ行かんならんぞ」と、言わされました。化学の人選は、香坂先生がされましたよ。

龜井　工学部を創るとき、綿密な計画をたて、長い準備期間をおいてやらないと出来ないとと言われるが、私にいわせると、急にやつたから出来たのです。実際のところ、五里霧中でやつたのではないですか。（笑い）

横田　おっしゃるとおりです。小田原評定では、前に進みませんからね。

前田 (教員組織づくりの) 人集めは、夏場から九月まで、正味

二、三ヶ月ぐらいでしょう。昭和二十三年、新制大学に切り替つて以後、関西では工学部を余りつくつていなかつた。関大に工学部ができるなら「お前、行かんか」と言える若い人材のストックが、京大にも、阪大にもあつた、ということです。

田中 そういう感じですね。

冷汗ものだった文部省の調査

横田 工学部の設置が認可されたのは、昭和三十三年一月十日ですけど、その前に大学設置審議会の現地調査がありますよね。その模様は……。

前田 忘れもしません。前年の十一月十一日です。天六学舎に文部省と審議会の先生方が何人も見えました。二階だったか、三階だったか、講堂のドアを開けて中をのぞき、ニヤーッと笑われるんです。二百人か三百人か入れる教室は、ガランとしているのに、その入口には「△△研究室」と書いた札が、かけてある。本当に、はずかしい思いをしたね。

田中 そうそう、大きな部屋があつて、それを仕切つたりしまして。三百人もはいれる部屋は文科系用で、それを工学部に使うのは無理でした。大学には、「無理だ」と、盛んに言つた記憶があります。

前田 あれで、よく許可しましたね。

横田 審査をパスするために、機械類を派手に見えるように配列したり、機械を巻紙で巻いて『角かくし』をするなど、苦労され

たように聞いていますか……。

田中 私は、審議会や基準協会に關係があつたので、委員としてよその大学にも行って見る機会が多かつたのですが、どことも設備はそんなに整つていませんでしたよ。

横田 ああ、そうですか。

小川 基準そのものが、緩かつたのですかね。

田中 それに関連して、実験・実習場は、現在の天六学舎・有鄰館のところにつくる計画だったのでしょうか。

田中 私は「天六でやる」ということで引き受けましたがね。結果は、千里山へ……。

小川 機械、電気、化学、金属の四学科がそれぞれ五十坪ずつ、計二百坪の実験場をつくる。そういう条件で、文部省の認可を受けているんです。

横田 実験・実習場が四棟……。

龜井 いえ、一棟を四つに区切つて、一学科五十坪ずつ使う。その「五十坪」の中で、学生の実験、卒業研究、それに教員の研究もあわせてやる、という計画でした。

小川 米軍のカマボコ兵舎の廃材を安く買つてきて、「仮実習場」の格好でもよいからつくつてくれ、と言つたりしました。港区で開かれていた国際見本市会場のソ連館を移築する話もあつた。いずれも沙汰やみになりましたけどね。

龜井 それについても、天六学舎地下室の実験は、ひどかつたですよ。ああいうところで、よくやつたものと思う。梅雨になると、天井からボタボタと雨が落ちてくる。それで、私の頭はハゲとなるのです。(笑い)

太田 あれには、悩まされましたな。

小川 久井専務理事の部屋にガスが入るようになつたんです。地下室からあがってね。當緒課長の松本（俊）さんが「くさい。何とかしてくれ！」と、言ってきたりしました。悪臭公害のはしりですよ。（笑い）

前田 久井専務理事らは「宿替えせんと、かなわんわ」なんてね。ちょっと書けんような話ばかりやな。

田中 でもね、書いといてもらうほうがいいんです。

亀井 あれで、学生がバタバタ倒れたことがありますからね。

菌田 その地下実験室ができる経緯を、もう少し……。

前田 先ほどの話のとおり文部省の調査が十一月、私が来たのが十月です。せめて一年生の教養段階の実験ができる程度には用意しないと、審査に通りそうにないんです。太田先生に「あんた、やつといてや」と押しつけられて、困りましたよ。

現実問題として、学生が入学してくるのだから、教室をつぶして実験室にしようと思つた。すると、教室は「第二部が使つていい」という理由で、事務当局が異論を唱えるんだ。困つて、地下室を歩いていると、物置き用の二部屋が見つかつたという次第で、「そこならかまわんだろう」と、実験室づくりが始まつたのです。

私が物理、小川先生に化学の実験室づくりをお願いしました。

今でも、あれでよく審査をパスしたなあと思います。

横田 初代工学部長に田中先生が就任されたのは、三十三年一月二十一日になつていますね。

田中 よくは覚えていませんね。

前田 専任教員に就任する予定者に「集まれ」と母令がかかり、初顔合わせをし、学部長、学部長代理を内定しました。堂ビルの清交社に行つた記憶があります。とにかく、おたがいに顔を見たことがない人ばかりで、みなへんな顔して並んだった。（笑い）

小川 ヘンな顔じゃないですよ。（笑い）

私は何と偉い先生ばかり来るとんやなあ、とびっくりしましたわ。俺なんか、ここへ来られるのかと心配になつたくらいです。

旦 スタッフとしては、すごい方々でしたからね。

田中 名前だけで、一度も出てこない人も名簿にはありましたよ。

菌田 それにしても、その時、全然知らぬ顔が多かつたのですか。私たち歴史をやつてると、たいてい学会などで顔をあわせています。その点、工学部は舞台が広いんですね。

小川 第一回教授会の招集者は、岩崎学長でした。工学部長事務取扱を兼務しておられて、確か大学院ホールの小さな部屋でした。

横田 大学院ホールの一番東棟の二階の端が、学長室でした。

小川 岩崎学長が、先ず「工学部の第一回教授会を開きます」と宣言、「学部長を皆で選任してくれ」と言われた。これは、最初から田中先生を推薦することに決まつていた。そこで、岩崎先生

は「田中先生、あとの進行をしてください」と退場されたので、

田中先生が「よろしゅう」というようなことで……。

前田 そうでしたかな。それは、一月十三日の学長主催昼食会。

清交社にも行つてますよ。

小川 私のノートによると、議題を持った教授会は、二月五日になつていますね。菌田先生に、工学部で日本史の講義を願つています。

菌田 ほ、ほう。そうですか。

小川 最初の一年は、感心に書いているんです。

亀井 「初心忘るべからず」ですな。（笑い）下間メモ（下間頼一教授）とか、片山メモ（片山佐一教授）は信用するけど小川メモは……。（笑い）

田中 私が恐れいつたのは、「工学部長代理」の制度でした。現に学部長がいるのに、代理をおくとは一体、何をするのかわからなかつた。夜間部（第二部）を担当する、という話だったが、工学部には第二部がない。工学部長代理とは、おそらく全国でみても例がないだろうね。

菌田 銀行には支店長代理がたくさん居ますけど……。（笑い）

田中 実をいうと、その学部長代理が、何もかもやつてくれるから私は勤まつたのですよ。非常によかったです。初代代理は太田さんでした。

出したり引っこめたりの「助手規程」

小川 初めのころの教授会で、一番問題になつたのは、「助手規

程」でした。工学部創設前の二月二十日に、取り上げています。

田中 ああ、あれは困りました。往生しましたよ。

小川 問題を持ち出しては、他学部からたたかれて、引っこめた

りしました。

横田 文科系学部の助手と違うから、工学部の先生方が、いくらい仰言つても「実験」というものがない法文経商の先生方にはわからぬないです。

田中 日本の大学の一大弊害だと思いますね。助手を何年したら講師にする、というような約束をして雇うなんて、もつてのほかです。会社が人を雇用するとき、何年したら部長にして、また何年したら重役にしますと、先の先まで約束するだろうか。そんなバカなことは世の中にありませんよ。

亀井 これは、年史に残しといつもらわんといかんことです。

田中 文科系では、ほとんど定着してましたからね。

若手の造反が「教授懇談会」を生む

亀井 それにしても、工学部ができた当座は、田中工学部長のもとで、ことごとに楯ついたものです。

前田 若手が、会合するような形で、天六周辺の喫茶店にタム口していくこともある。田中先生は、放つておきもせず、「ちょっと呼んで来て」と、事務に頼まっていた。すると、皆、えらそうな顔をして戻つてくるんです。（笑い）

亀井 教授会といつても、現役教授は田中部長、太田、前田、小

小川 前田先生が三十八歳、私が三十九歳で、あとは国立大学定年退官組の六十歳以上ですから格が違う。席は、年功序列で決まっており、末席につらなつてゐる私が発言しても、取りあげてもらえなかつた。

龜井 その時は、まだ教授に就任していない人たちが「教授会」を開いて、何事も決めて行く。われわれ雑兵は、決定事項のお達しを受ける形ですよ。だから「何を」というわけです。
助教授以下全員は喫茶店にとじこもつて「用事があつたら電話かけてこい」といった調子。（笑い）コーヒー一杯で、ねばつてるんです。（笑い）

教授会が開かれても「助教授以下はのいとれ」と、はずされたいた。いつまで待つても声がかからないので、「けしからん。ストレッショウ」ということになつたんです。しかし、結果的には、あの反抗によつて「教授懇談会」が生まれ、助教授もディスカッショングに参加できる工学部の伝統が生まれたんです。

小川 三次募集に出願者は百八人

横田 入学試験は、エピソードに富んだものだつたようですね。

前田 学生募集の新聞広告には、工学部の募集人員は書いてあつたが、「申請中」としていました。まだ、認可されない時点では……。

小川 入試は一次が三月八日と九日です。初日が数学（解析Ⅰ、Ⅱ）、物理・化学、二日目が国語、英語、社会の五科目で、国立

大学と同じでした。志願者はさっぱり、二次試験に期待をつないで、合格ラインをきびしくしてバンバンはねた。ところが、二次募集も思わくがはずれて定員に満たない。最終的に三次試験までやつてます。

薗田 入学式が四月十一日、第三次入試が二十日に行われています。入学式後の入試とは変わったケースですよね。

小川 二次の結果が悪かつたでしよう。そのとき、「志願者が集まらんのは、関大に工学部ができたことを、受験生たちが知らんからだ。宣伝の仕方が悪いせいだ。今度は必ず集まる」と、全国紙三紙に三日間、「学生募集」の広告を百数十万円かけて出した。いよいよ三次の募集締め切り日の午後四時ごろ、皆、志願者数が気になつて、天六学舎の事務室に集まつた。前田先生の顔も見えた。

前田 そう、事務の山下（正隆）君が「口今の出願者は百八人」という。黒板の数字に「ふえんなあ」と言いあつてると、久井専務理事が入つてきて報告を聞き、「百八つやな。こりや、しまいやな」（笑い）

小川 百八人、百万円以上も宣伝費につきこんで、この始末でしょ。みなシヨンとしてしもうて……。

薗田 試験科目のせいもありますね。

小川 理科系の教授陣は、私大の経験者が少なかつたのが、失敗の原因でした。すべて国立大学並みに考えていましたから。二次の段階で、数学、理科、英語の三教科に減らす論議がありましたが、クレームがついて実現せず、やつと三次に三教科になつたん

前田 大学入試は、実施する側にとつてもむずかしいと痛感した

ね。

田中 それで、三次でおしまいになりましたな。

旦田 あのような状況で入学してきた学生たちは、今思えばスタート期を形成した功労者とも言えますね。

人間的にはすばらしい一高出身学生

田中 入試に関連して、関大一高からの優先入学問題にも悩みましたよ。一高の校長は「生徒の保護者は、皆、わが子が大学に行けるものと思っている」と言うんです。ところが教授会は「そうはいかん。他学部はなかなか強硬にやっている」というんです。

ま、一律に別に試験をすることにしましたけど。

横田 校長は三島（律夫）さんでしたか。

田中 そうです。優先入学要求には弱りました。

旦 「優先」のことばかり、何でもとるわけじゃない。ただ、工学部ができた当時、一高生は文科系志望で入学してきた者ばかりで、先生方が進路指導しても、なかなか工学部に行こうとはしなかった。

前田 一高は付属高校みたいなものだから、という考え方もあつたけど、「いらっしゃい、いらっしゃい」と、いい加減なことも言えませんしね。

亀井 夏休み中に補習授業をするなど、一高としても努力されて

いる。その点の評価も必要です。私は、絶対的に自信のある者だけを推薦せよ。そのためには、一高に落第制度をつくってはどう

かと言っているんです。

前田 一高は受験勉強に力を入れないからあの大学入試のやり方では弱いですね。

亀井 一高問題は、二高、三高、四高をつくらないと、関西大学の将来はないよう思うな。

小川 一学科百二十人のうち十人ぐらいが一高出身です。それを無条件で、二十人でも三十人でもどけるのも一つの方法ですよ。それだけ一般入試がむずかしくなる。すると、関大工学部はむずかしい、と評価が上がります。大学の評価が高まれば、一高に入る生徒のレベルはアップしてくる。その辺からやってみると、いいんじゃないかと思いますな。でも、一高からくる学生は、人間的には非常にいいです。

亀井 少々、数学ができるより、人間的に良いのがいい。ある部分だけ非常に優れている学生を育てるのが、私学ならではの使命だと思う。

小川 他学部で、余りとられないのなら、工学部で皆とつたらどうですか。（笑い）

田中 ちょっと賛成しかねます。スーッといぐのと、途中に一つフシがあるのとでは大分違いますよ。いまの学生は、なまけることのみ考えてますから。

千里山へ完全移転が発展の力に

田中 忘れんうちに言つときますが、工学部創設は時期的に非常によかつた。というのは、工学系に対して文部省の特別助成金が

出ることになり、関大はその第一号になつたからです。

私は、文部省に呼ばれて、「いい加減なものに使われると、大蔵省から『あんないたらくでは来年から打ち切る』と言われる恐れがある」と、クギをさされたんです。私は、もつともだと思つて、久井専務理事にその趣旨を伝えた。すると、久井さんは「あんたに来てもらうとき、恥をかかすようなことはせんと約束したんだから……わかった」ということでした。おかげで、助成金はずつと続き、工学部はいい学部になつた。

横田 初年度二千六百九十万円が関大にきています。総額一億九千万円ですから、かなりの比率（一四・二%）です。

前田 創設早々に、文部省から「申請せよ」と言つてきて、大あわてしました。補助率は機械器具が三分の二、所謂「マル理」です。

亀井 「マル理」では、苦労した一人ですよ。実験装置の申請が、安く見積つて出してあるから、いざ買う段階になると、市販のものはとても買えない。そこで、図面を描いて業者に注文して作らせる方法をとつたりしたものです。

前田 「マル理」で買った実験・実習機器がふえて、天六学舎には入らなくなつて、メーカーに預け放しの事態が生じてきました。その意味では、千里山の実習場五棟（機械二、電気、化学、金属各二）は、いわば「マル理」のおかげで出来たことになるんですよ。

亀井 実験・実習工場が竣工したのは、工学部創設の翌三十四年九月三十日となっています。とすると、天六学舎の実験・実習場は結局、建てずじまいですか。

亀井 そうです。天六学舎の実験室問題をワイワイやつているう

ちに「五十坪」実験室ではとても足りん、八十坪必要だ、さらに百坪はいる、とだんだんと大きくなつて。

前田 そうなると、これはもう天六ではできんなあ、ということに……。

小川 三十三年の中ごろです。久井専務理事に呼ばれて、「いつたい、あんた方はどんなものをつくるうとしているんだ。計画書を出せ」と言われてね。皆で計画書を作つた。

田中 そんな相談、私は知りません。もう無茶苦茶や。理事会で、どう言おうかと思っていたら、久井専務理事が積極的で、非常に快く千里山移転計画を引き受けてくれたんです。千里山移転に踏み切つたことが、今日の工学部がある最大の原因で、久井さんの卓見です。本当に偉い人やと感心しましたな。もし、天六にジッとしていたら、と思うと……。

亀井 あのころ、千里山周辺は空地が多かつたから「ようけ空いとるやないか」とか、「大体、学校のど真ん中に運動場があるのはおかしい。あれをつぶしてはどうか」とか、勝手なことを言つていた。

田中 若い連中は、私の知らん間にやりよつたんですよ。

横田 そうですか。

亀井 工学部長が知らぬことはない。知ると、都合が悪いから知らん顔してね。（笑い）

引越しは、教職員と学生で全部やつた。トラックに上乗りして意氣盛んだつた。

前田 積むのも、おろすのも、すべてわれわれの手でやつたな。

亀井 学生には、カレーライス一杯のお礼だった。実験機器が盗

難にあつたらと、教員も宿直警備をいとわなかつた。今でいう方
ードマンもやつたね。

横田 実験・実習には天六一千里山間にスクールバスを運転して

いましたね。千里山完全移転は、創設三年目の三十五年秋。

亀井 無我夢中、毎晩十時、十一時まで頑張つたものです。井一
つでね。

旦 千里山完全移転の頃から、ようやく、工学部の基礎が固まつ
た、ということでしょうか。

亀井 確かに、口はばつたい言い方ですけど、工学部がパーツと
が関西大学全体を押しあげたと思いますね。

旦 三十二年ごろ、工学部の計画段階で私どもまだ若かつたし、
しゃれたことを言つてました。「眞の総合大学として、工学部が
できなかつたら、ジリ貧にならないか」と。

就職率一〇〇%の第一回卒業生

菌田 初めて関大から工学士が世に出たのは三十七年春ですね。

初期の四年間は、天六・千里山にまたがる学生生活で、印象は強
かつたろうと思います。

亀井 何しろ、第一回の卒業生には見習うべき先輩もいないので
すから。実験・実習をふくめて設備が十分でなかつたので、スク
ラップを拾つてきて「一から作つて卒業研究をやつた」「関大工学
部の歴史を創る」というひたむきさが感じられました。

前田 だから、私たちも彼らに報いましたよ。先生方が「工学部

は、新しい学部だから、われわれで就職の世話をしよう」と話
あって、確か前年の五月にはツテを頼つて職場開拓の行動を開始
した。

機械科では、定員百二十人中六十余人が卒業したが、彼らが会
社訪問をすると、面接だけで採用が決まるという好調さで、一週
間ぐらいで「全員完切れ」になつてしまつた。皆、いいところへ
就職していますよ。日立や東芝から「五人くれ」と要請があつて
も、こちらは「五人もやれん。二人までや」と断わつたりしたほ
どですから。

亀井 金属工学科は、四年で卒業できたのは五十人足らずでした。
た。それぐらい絞つたんだから、自信を持って送り出せました。

人生は、豊かであればいいけど、苦労も必要です。設備が完全
に整つたから良い、とは言えない。むしろ足りない方がいいんじ
ゃないか。それを克服して、築いて行く意識こそ大切だらうと思
います。

小川 当初の意気込みという点では、先生方も熱っぽかつた。

「私学の中で一番良い工学部をつくろう」と力をあわせて踏んば
つたから。関大は金持ちで、何でもつくってくれる、と聞いてい
て、張り切つたのかな。（笑い）

横田 それは、虚像ですな。（笑い）

太田 私も、同級生仲間から「関大は金持ちでいいところへ行つ
たな」と、祝福されたりしました。

亀井 虚像を実像にしたところに値打ちがあるんですよ。初めか
ら実像だったら、決していいものにはなつていませんよ。

太田 私、関大へ来て感じたことは、気楽な考え方かもしがませ

んが、寄合世帯という意識が少なかつたですね。

横田 京大、阪大の閥なんか、なかつたですか。

小川 みんな、放り出された元の大学を見返してやろう、という気分があつたね。

龜井 まあ、植民地戦争時代における外人部隊ですね。

横田 私大の経験をお持ちなのは、前田先生お一人ですね。

前田 立命館に三十二年まで七年間居たので、私学の長所短所は私なりに理解していたつもりです。それが、関大へ来てみると、皆さん、口は達者だし、京大、阪大に居た方ばかりで、それぞれ母校で経験した国立大学方式でやろうとされる。

なまじ私学を知っていると、つい「こんなものや」と妥協してしまうのですが、とても無理だなと思つてることが、関大では次々と実現して行くのです。これは、私にとつて、いまだに驚異です。

小川 そうですか。

前田 おかげで、ここまでこれたのでしょう。猪突猛進的なところがありましたなあ。

最短記録だった大学院開設

田中 工学部ができて四年後には大学院修士課程ができる、さらに二年後には博士課程をおくことができました。順調そのもので、全国的にみても例がなく最短距離の記録です。

菌田 第一回卒業生にとつては、苦労もあつたけれど、門は開かれていたわけです。そこに至る道づくりにご苦労があつた。

前田 マスターとドクターの同時申請をしたんです。三十七年の修士課程開設のとき、早大の村井資長さんが現地調査団の委員として見えた。そのとき、村井さんは「同時申請は旧帝大くらいしか例がない。二年待てば、あなたのところなら必ず（博士課程）いけるから」と言われた。

横田 最初からおいでになつたメンバーがよかつたから、大学院ができた。

田中 無論、そうです。しかし、意外と難航したんですよ。大学院の教員組織は、書面の上ではできる。その先生方の学位は、京大が阪大で実績をあげて取つたもので、関大で作った論文ではない。先生方は立派でも、みなよそでやつた仕事じゃないか、とう。それに、大学院としての研究設備は、どうなつているのか、と問題点の指摘があり、そりやむずかしかつた。

博士課程ができる三十九年は、私が定年退職する。それで、大学設置審議会の人々に「私が関大を去る置土産なんだから、むずかしいこといわんで考えてくれ」と頼んだ。先生方には立派な人がそろつているんだから、当然ですよ。

龜井 設備の点では、最初これくらいの予算でやるという計画を、文部省に提出してあつたんです。

田中 うん、うん。

龜井 審査を受ける図書でも、お互に苦労しました。本屋と交渉して、在庫の研究書を借りて並べた。個人の蔵書も、風呂敷に

包んで図書室に運びこまれた。タテに積むよりヨコに並べる方が、多く見えることを、あの時初めて知りましたな。

小川 私の蔵書にも、「関西大学図書館所蔵」の印判が捺され、その上に抹消の線が引かれているのがあります。まるで、他人の本みたいな感じです。（笑い）

横田 短期間で、よくやつたわけですね。

旦 最初のうちは、まさに屯田兵的な開墾作業だったといえましょう。

横田 田中先生がおっしゃるように、技術革新時代と文部省の理科特別助成金など、天の時を生かし、加うるに地の利、人の和があつて急成長したことがわかりました。本日は長時間お話しいただき、ありがとうございました。

文学部教授 横田健一

太平洋戦争で徹底的な敗戦、特に米空軍の大爆撃によって焼土と帰した日本の復興は、戦後数年間遅々として進まなかつた。昭和二十五年六月に勃発した朝鮮戦争は、米軍の特需という刺戟を、日本経済界に与えた。日本経済の復興は、昭和二十八年の朝鮮戦争休戦によつて特需がなくなり頓挫するかに見えたが、それは一時的なものであつた。

第二次大戦後の世界的な経済復興と、オートメーション化および電子工学や高分子化学等の著しい進展に基づく技術革新によつて、日本経済界は「神武景氣」と呼ばれる、大躍進時代を昭和三十年代初頭に迎えた。

「生産性向上」は一つの合言葉となつた。新技術による多くの工場が建設され始めた、そこに著しい隘路となつたのは、技術者の非常な不足であつた。理工科系の大学卒業生は、引っぱりダコのありさまとなつた。

関西大学は創立以来、法文系学部のみで六十年近くを経過していながら、戦時中、技術者不足が叫ばれ、かつ軍部は私大法文系を無用の長物視し、これを取り潰そうとする気配さえ示した。これに危機感を抱いた本学理事者は、昭和十九年三月、関西工業専門学校を開設した。そして、これを昭和二十三年四月、新制へ転換するに際し、工学部に昇格させようとしたが、設備不充分として、文部省の

認可を得ることができず、昭和二十五年四月より短期大学部商工経営科（商業経営・工業経営各專攻）として転換せしめた。しかし、これも非常に世上の評価が低く、所期の目的を達し得なかつた。それで昭和三十一年三月限りで学生募集を停止し、社会の要望が強い優秀な工業技術者を養成する工学部を新設することに決した。

これは理事会、評議員会のみならず多数の校友の熱烈な要望があつたからである。むしろ既設学部の古参教授たちの間に、工学部創設に反対する動きが見られた。結局「既設学部の充実に対しても、工学部の設置が不利にならないように」という条件付きで、反対運動はおさまつたのである。

昭和三十二年四月より、短期大学部の教授は各学部へ所属替え、短大兼務として配属された。その翌年に急速に創設運動が生じた工学部設置について、準備委員として積極的に活動したのは、故太田雞一氏であった。短期大学部中、唯一の工学博士で、鉄鋼関係で幾つかの独創的研究があるばかりでなく、人柄が明朗快活、精力的な努力家であつた。

このたびの座談会に太田雞一氏が出席されていたならば、多くのことが、もっと明らかにされたであろうと惜しまれる。なお大學設置基準協会の委員であり、私立大学連盟の常務理事として、文部省に対し発言力の強かつた故板橋菊松博士が昨年亡くなられ、基準協会での動向など、もっと伺つて置いたならばと悔まれる。

しかし初代工学部長として、創設期の中心人物となられた故田中晋輔博士が、この座談会に出席し、その経験談を語られたことは、非常に貴重である。田中博士もその後亡くなられたからである。この座談会を通して、読者が感じられるように、本学の工学部設

置は、戦後の全国新制大学中においては先頭を切って、非常にタイミングがよく、文部省の理科助成金制度の第一号を受け得たのである。

また最初から、京大、阪大等の第一級の学者たちが、すぐれた愛弟子たちを引きつれて来任せたことも、非常に有利であり、開設当初の設備の不充分さを補つて、設置基準委員や文部省の信託をよくすることが出来たのである。

次に座談会で語られているように、最初は天六学舎が第二部の授業に夜間のみ使用されているので、昼間は空いているから、この時間に工学部の授業を行うのだという、姑息な消極的発想を持つていたが、これを棄てて、千里山で本格的建設をやつたのがよかつたのである。

工学部の研究、実験は夜遅くまで行わることは普通で、時には徹夜までして行われることが少くない。昼間のみで授業できるものではない。工学部の実情を知らぬ法文系学部の卒業生には、そうしたことが理解できなかつたのである。こうしたことは、工学部の実験研究室にいかに広大な面積の土地が必要かということについても同様であつて、天六学舎のように狭隘なところではやれるものではない。本学は千里山学舎に当時の他の私大にはほとんど見られぬほど、広いキャンパスを持つて、かなり自由に工学部学舎を建設し得たのである。

法文系学部と発想を異にしていて、その後、大きな問題を残したのは、田中晋輔氏の発言に見られる助手問題である。既設法文系学部の助手は、本学の場合、教授の研究の手伝いや学部の研究事務を補助させるよりも、むしろ教授候補要員として、少数の精銳を厳重な選抜試験による説考の結果選任する。学生に教授することはな

い。むろん助手が研究業績を挙げねば昇任はされない。

これに対し工学部の助手は、一学科にさえ多数を置き、実験の準備や学生の実験指導を行うが、その将来に講師以上教授まで昇任する約束を与えないのが一般である。この点の喰い違いが問題となつた。法文系の学部では、なぜ工学部は多数の助手を採用するのかといふかり、工学部の方は、なぜ助手に将来の昇任を保証せねばならぬのかといふかるわけである。

この工学部助手の待遇が法文系学部の助手の待遇との間に相違のある点が、その後大きな問題となつて、その後長らく紛糾するが、それは別に論じなければならないであろう。

この座談会は、本学工学部のスタートの時代の発端とした新興の氣分をよく物語るものとして注目して頂きたい。工学部創設の過程を評議員として眺めて来た者として、幾つかの場面の記憶の今なお鮮かなものがあるが別にしるすこともあろう。